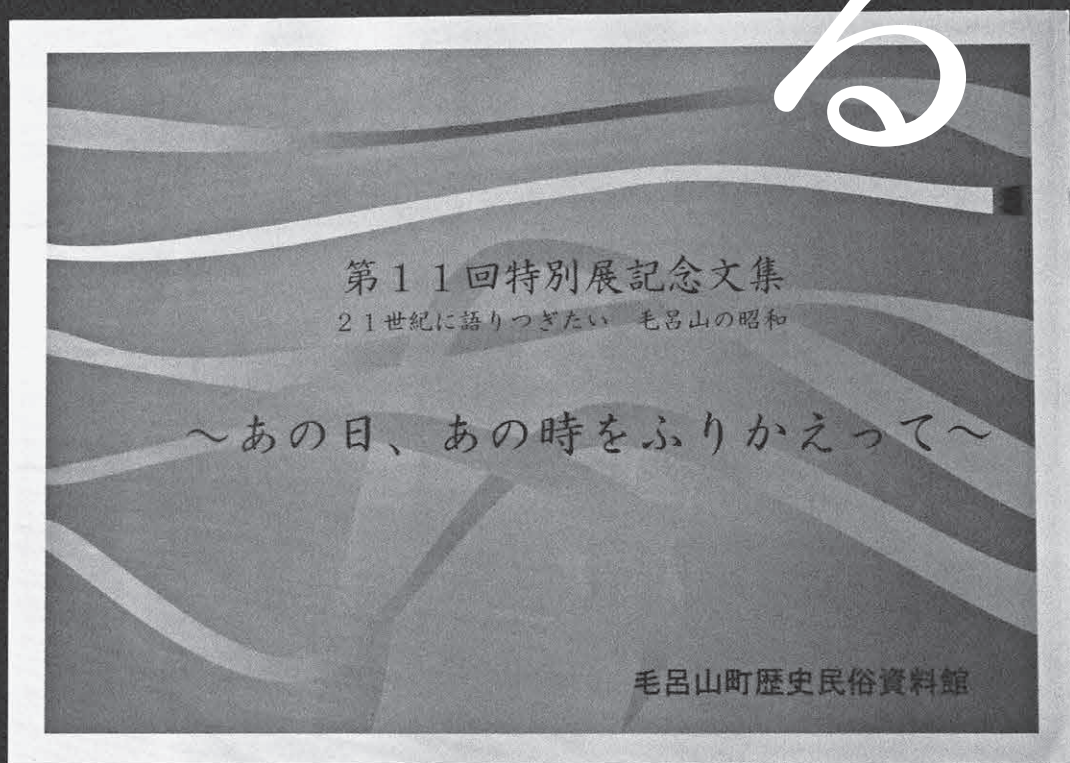


伝える



平成12年(2000)10月、毛呂山町歴史民俗資料館において、「21世紀に語りつぎたい 毛呂山の昭和～あの日、あの時をふりかえって～」という特別展を開催しました。この特別展にあたり、歴史民俗資料館では、昭和の時代を生きた人たちの声を後世へと残すための体験手記を公募し、その結果、65人から貴重な体験をつづった手記をいただきました。

体験手記の公募を昭和元年から40年ごろまでと期間を定めて行ったため、文集には、戦前・戦中、戦後の生活などが主に掲載されました。

それから15年の歳月が経ち、今年、戦後70年の年にあたります。

当時、昭和を振り返り、手記を書いた人たちは、その後その内容を、家族や若い人たちに、どのように伝えたのでしょうか。

今回の特集では、手記をお寄せいただいた人を中心に、その後のお話などをお聞きしました。

戦争での体験を本に著すことで、多くの人に伝える

稲葉さんは国民学校在学中に毛呂山町に疎開。昭和20年3月に自宅のある日本橋に帰宅し、その後まもなく、東京大空襲に遭遇しました。

書いたり、声に出したりしなければ伝わらない

私には、「学童集団疎開」と「東京大空襲」のことが戦時中の体験として、今も鮮明に心に刻まれています。

私は、その体験をよく息子や孫に話すようにしています。孫がまだ小学生のころ、私が話した毛呂山町への学童集団疎開の話を書いたことがありまして、そのことを聞いたときに、本当に嬉しかった覚えがあります。息子も私の

ことを喜ばせてくれようと、たまに毛呂山町の方面へ車で連れて行ってくれます。

最近はまだあまり行っていませんが、戦時中の体験を大勢の人の前で話したこともありました。それは、私が学童集団疎開を体験したことや東京大空襲に遭った話を、本にして出版しているからだと思っています。元々物を書くことは好きだったので、またまた知り合いに作家の人がいたため、体験を本にすることになったのです。私には「何で戦争をするの

か」が分からず、大人という大人にそのことを尋ねた時期がありました。そのうち、戦争に対して、「怒り」のようなものが沸き起こり、それが私の体験を本にすることの原動力になった気がします。

人間の行為として、戦争ほど無駄で愚かな行為はないと考えます。そのことをひとりでも多くの人に分かってもらいたいのです。戦争を体験した人が、その時何を考え、どう行動したかは、体験した人でないと分かりません。それは、書いたり、声に出した

り、「言葉」にしないと、体験したことのない人には、伝わらないと思うのです。私はこれからも、文字や語り言葉を使って、この体験を伝えていきたいと思っています。



稲葉喜久子さん（東京都東久留米市）



稲葉さんの著書
『べったら市』（東銀座出版社 / 右）
『てのひらの記憶』（草土文化 / 左）

自らの体験を講演や記録として残すことで伝える

「あの日、あの時をふりかえって」に体験手記を寄稿した人たち。その後、講演活動を行ったり、自らの体験を記録に残したりと体験を後世に伝えるための活動を行っている人がいます。



近衛歩兵入隊時の神田進さん

戦争は、全ての人が不幸になるだけ

私の軍隊への入隊は、19歳の時で、それから間もなく中国へと出兵する一団に選ばれました。当時は、軍国主義を高揚する教育が行われていたため、当時の私ぐらいの年齢の男性にとって、「日本男子なら、お国のために軍隊へ入る」のは普通のことでした。そのため入隊することは、当たり前だと思っていました。しかし、中国へ出征するとき海上から見た下関港の灯りに「もう、二度と日本に帰れないのだろう」と感慨に浸った思い出があります。

昭和20年8月15日、私は上海の南、呉淞という地にいました。現地では、その時も戦闘が行われていたため、その日にも多くの人が亡くなりましたが、私は残留兵として戦闘に参加していませんでした。玉音放送を耳にすることができました。玉音放送を聞き、連隊長の合図で一斉に武装解除をしたとき、多くの同



神田進さん（毛呂本郷）

胞が涙していたことが印象深くに残っています。

私には兄がいました。兄も出征し、トラック島に出兵していたのですが、運よく復員することができました。兄は几帳面な性格だったため、トラック島での体験を手帳に残していました。その手帳が戦後、話題になり、あちこちらの戦争展で展示されたことがあります。

私も内地に戻ってから、家族に残すために記憶をたどり、入隊してから復員するまでの記録をつけました。戦争は、全ての人を不幸にするだけです。この事実を、ひとりでも多くの人に知ってもらいたいものです。

戦争の体験は、語るほうにも辛い体験

戦争で悲惨な体験をした者にとって、体験の話をするのは、辛く苦しいことでした。私も長らく教員生活を送りましたが、その間生徒に対し、戦時中の体験を話すことはありませんでした。

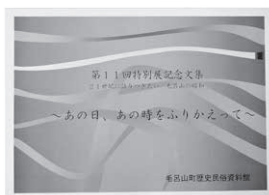
定年してからしばらくしたころ、新聞を読んでいると、

ふとある記事に目が留まりました。それは大阪の出版社社長の戦争に関わる話でした。その社長は、「戦争の記憶を風化させたくない。そのために、体験者から手記をお寄せいただき証言集として出版し続ける」とのことでした。その内容に深く感銘を受け、私の体験が役立つのならと思い、その会社に連絡をし、原稿を送りました。結果、私の証言は、本に掲載されました。それから、私にとって辛い体験であっても、それが必要とされるのであれば、伝えていく必要があると思います、講演活動を始めました。



えはらかんじ 荻原寛治さん (玉林寺)

私は、父の仕事の関係上、戦時中、フィリピンで暮らしていました。昭和20年4月米軍のフィリピン上陸から、12月の引き揚げまで、とても過酷な生活を強いられました。明日生きていられるか分からないなか、死体やけが人が横たわる場所を家族と逃げ回ったこと。長兄・次兄・弟・母親が戦争の犠牲になったことなどが私の体験です。



伝えることの必要性を実感した出来事

当時、私は八高線の高麗川駅から、人間の軍需工場に通っていました。日高には高萩飛行場、入間には豊岡陸軍航空士官学校があったため、よく空襲に遭いました。その度に防空壕に逃げましたが、なかには逃げきれず跳弾に背中を貫通された子もいました。私の夫も徴兵されたのですが、農家の長男だったこともあり、内地に在るうちに終戦を迎えたようです。しかし、夫も私と結婚してから8年後、35歳で他界します。それから苦労を重ね、3人の子どもたちを育てながら、家と畑を守ってきました。

実は、この事は家族内ではあまり話していません。何かしらの戦争の記録を残したいと思い、太平洋戦争のDVDを購入したのですが、見ていません。息子も戦時中の話を、あえて聞かないようにしているのかもしれない。私自身も口で話しただけでは、辛さ



きしひさこ 岸久子さん (川角)

や悲しさを伝えきれないものだと思います、特に話さないようにしていました。

3年ほど前、当時の川角小学校の校長先生から戦時中の体験を子どもたちに話してほしいと依頼がありました。独りでは心もとなかったため、友人2人といっしょに話させてもらいました。子どもたちがどこまで理解してくれたのか、分かりませんが、校長先生が「聞いたことが分からなくても、このことは子どもたちにとって、とても貴重な経験になった」と話してくれたことが、印象的でした。

今後機会があったら、話したいと考えるようになりま

家族が体験した記憶を受けつぎ、次の世代へと伝える

体験手記を寄稿していただいた人たちのご家族として、自分や自分の家族が体験した出来事を、次の世代へと伝えていかなければいけないと考えている人たちがいます。



木村弘代さんの父・木村富次郎さんの出征時の写真
(写真右が木村弘代さん)

苦勞した体験こそ、語りつがなければならぬ

私の父・富次郎は、背が高く、とても几帳面な人でした。父に対する思い出といえ、皇居の二重橋に連れて行ってもらったことが、楽しかったこととして、今も心に残っています。そんな父も私が小学4年生の時に、戦死しました。昭和18年11月に徴兵され、坂戸境に母・なかと見送りに行ったときに「年寄りと病人を置いていくから、よろしく頼む」と言われた時には、子どもながらに胸がつまり、泣いてしまいました。

私の家は、非農家であったため、戦後の食糧難の時代はとて苦しい思いをしました。そんな家計を支えてくれたのが、母でした。私の家は、たばこ屋ですが、祖父の代から餅菓子も製造、販売していました。終戦後、母はそれを継ぎ、昼に作った餅菓子を夜上野まで売りに行き、朝返ってくるという生活を2年ほど続け、わずかなお金を稼いで



木村弘代さん (苦林)

きてくれました。私も子どもながらに、母に苦勞をかけたせないようにと、少しでも家の手伝いをするようにしていました。

時代は移り変わっていくものですが、飽食の時代になり、物のありがたみを分らない人が多くなってしまうように感じます。また、人を思いやる気持ちも薄れてしまったようにも感じます。戦中戦後の話は、家でもあまりしていません。物のない時代に苦勞をした私の母や私の記憶、そして助け合わなければ生きていけなかったころの体験は、語りついでいかなければならないものだと思います。

自分から積極的に知る努力が必要

歴史民俗資料館の体験手記に寄稿したのは、私の父・福田三二です。父が寄稿した内容は、二人の兄の事でした。父は7人兄弟の7人目で、兄が二人いました。末っ子であつた父は、兄たちから特に可愛がられていたようです。そんな父の兄たちも戦争で命を落としました。戦後兄たちの事を幾度も懐かしそうに語っていた父のことを、今でもよく覚えています。

父が亡くなる少し前、花嫁人形2体を神社に奉納していました。私の問いかけに父は、「兄たちは、人生の一番楽しい時期を知らずに戦争で亡くなってしまった。あの世で夫婦で幸せに暮らしてほしい」と話してくれました。それから数日後、夢枕に立った両親から「よいことをしてくれ」と褒められたことを嬉しそうに語っていました。父は、兄たち2人をずっと不憫（ふびん）に感じていたのでしょう。戦争は、

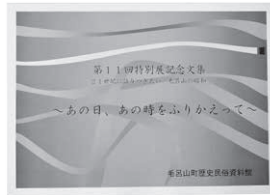
残された人の心にも深い傷跡を残すものだと感じた出来事でした。

その父もすでに他界しました。戦争が終わって70年が経過し、戦争に行つた人の体験や、戦後を生きた人の経験を聞く機会も減ってきてしまつていきます。

戦争体験者のなかには、その辛さゆえ、口にしない人もいます。しかし、私たちには、そのような体験を知る義務があると思います。聞く機会がなかったから知らないとか、悲惨すぎて聞きたくないとかではなく、自らが積極的に本などをとおして学び、各々が記憶に刻んでおく必要があるのではないのでしょうか。



山崎綾子さん（市場）



「伝える」ことの大切さと難しさを痛感

父・廣己（ひろみ）は、極寒の満州での強烈な体験を折に触れてよく話していました。子ども心にはまたその話かという思いでしたが、大人になるにつれ、大きな歴史の動きの中で過ごした激動の人生だったんだなという認識に変わっていきました。

真冬には凍傷にかからないように外から家の中に入るときは耳をはじめ手足全体をよくマツサージしたこと。夜間の立哨（りつしょう）は何が起るかわからない不安でいっぱいだったこと。宮古島へ船で移動する途中、潜水艦に発見され魚雷を受けると命にせず、それで爆発し難を逃れたこと。着いた宮古島で飛行場づくりの日々を送り、そこで終戦を迎え武装解除になったこと。捕虜として1年間、沖縄で過ごし、嘉手納（かてな）基地の建設や牧港（まきみなと）の整備などの労働をさせられたこと。監視の銃口が向けられ、撃たれて殺された仲間が

いたことなど、多くの話を聞きました。

戦後70年の節目にあたり、あらためて「伝える」ことの大切さと難しさを感じています。機をとらえて意識的に取り組まないといけない、なし崩しに終わってしまったかもしれない。妻には、父の話はしているのですが、子どもたちにはあまり話していません。いつの日か機会を見つけて子どもたちにも父の残した文集を読んでもらい、間接的ながら戦争体験を伝えていきたいと思っています。家族に対して、伝承していく働きかけが必要であることを痛感するとともに、今後の課題を感じています。



西川正己さん（葛貫）

絵画をとおし、原爆や戦争が どういうものなのかを伝える

丸木位里・俊夫妻が、原爆投下後の惨状と多くの被爆者の記憶を描いた『原爆の図』が本年6月から、アメリカで展示されています。

戦争や原爆の体験を聞く ことで、今を考える

丸木夫妻は、後世の人に、決して原爆のような惨劇を体験してもらいたくないと考えて『原爆の図』を残したのでしよう。

戦争の記憶や体験を語りつぎ、伝えることは重要なことだと思いますが、同時に、記憶を引きつぐことの難しさも実感しています。実際に体験すればよく分かるけれども、そのときには多くの人が亡くなっています。爆心地で一瞬

にして亡くなっていった人たちの体験は、私たちには知ることができません。丸木夫妻もその難しさは、分かっていたのではないかと思えます。それでも描かずにはいられない思いに突き動かされて、『原爆の図』を描いたのです。

ぜひ皆さんには、『原爆の図』を見に来ていただきたいと思えます。実際に絵を体感し、原爆によって傷つき辛い思いをした人たちの「痛み」に想像力を広げていただければと思います。『原爆の図』には、あの時代を生き、死ん

でいった人たちの、悲しみや苦しみ、そして願いや願望、愛情など、様々な感情と記憶が注ぎ込まれています。ご覧いただくことで、きっと何か心に響くものがあるはずです。

人の命には限りがあり、いつか原爆や戦争を体験した人がいなくなる時代が来ることでしよう。たとえ困難であったとしても、戦争の記憶を語りつぎ、世代を超えて伝え残すことは、大切な試みだと思えます。それは単に歴史の事実を知るだけでなく、今の

時代、そしてこれから先の未来を生きる人たちが、命というものをどうとらえ、どのように生きていくのかを考えるための道標になると信じています。



おかむらゆきのり
岡村幸宣さん（丸木美術館学芸員）



「原爆の図 丸木美術館」
（東松山市下唐子）
1950年から丸木位里・俊夫妻が描いた『原爆の図』を誰もが、ここに来ればみられるようにと、1967年に作った美術館。



原爆の図 第5部《少年少女》1951年 丸木位里・丸木俊

毎年、8月になると戦争を取り上げた新聞記事やテレビ番組を目にする機会が増えます。その様な記事や番組を見ることができません。また、毛呂山町歴史民俗資料館や原爆の図 丸木美術館でも戦争のことを学ぶことができます。

辛い記憶と悲惨な体験を私たちの心に刻み込んだ戦争。戦後70年が経過し、その記憶や体験も薄れつつあります。戦争の体験は、体験した人でないと分かりません。しかし、その記憶を伝えようとしている人がいます。

物事を「伝える」ためには、伝えられる側が積極的に聞くという意思を持っていないと伝わらないものです。戦争という辛い記憶と悲惨な体験を後世に「伝える」ためには、伝えられる側の人たちの努力も不可欠なのです。